

= 今年度上演曲のご案内 (2) =

モテット第 2 番 (みたま わが弱きを 助く) BWV226

カンタータ第 26 番 (はかなく むなしき 地なるいのち) BWV 26

大村 恵美子

モテット第 2 番

(みたま わが弱きを 助く) BWV226

<モテット>の変遷

中世のグレゴリオ聖歌の旋律に、新しい声部を付け加えることで成立した<モテット>は、はじめは宗教的な歌詞内容で典礼音楽の役割を果たしていたが、時代が下るにつれて、声楽技法の開拓の場となり、内容も世俗的な恋愛や社会風刺にまで広がってゆき、グレゴリオ聖歌だった定旋律は、流行歌にとって代わられたりした。

さらに、貴族社会での室内楽器を伴う独唱モテット、教会での大規模なオーケストラと多声部複合唱の祝典モテットなどへと、ヨーロッパ各地でそれぞれに多様な発展をたどる。

バッハがトーマス・カントルに就任した頃のライブツィヒでは、この<モテット>形式は、ほとんどもう過去の作曲手法となり、礼拝音楽の中心は<カンタータ>に移っていたので、バッハも、教会のためには特別新しい作曲をしなくて、教会の伝統的資料となっていた、内外の先人たちのモテットを用いてもよかった。

特注の機会音楽に<モテット>作曲

しかし、冠婚葬祭の特別な行事の機会に、富裕なライブツィヒ市の個人などから依頼されてモテットを作曲することがあり、この BWV226《みたま わが弱きを助く》も、1729 年 10 月 20 日に、ヨーハン・ハインリヒ・エルネスティの埋葬式に用いられたものである。今日残されているバッハのモテットの中で、初演の事情がはっきりしていて、オーケストラ部分の楽譜(二重合唱の合唱声部と同じものを、第 1 合唱と共に弦合奏、第 2 合唱と共に管合奏で演奏する)まで指定されている、唯一の作品である。

雄大な「ロマ書」の信仰表現

全体は 2 部分にわかれ、二重合唱(混声 8 部 4 部)の壮麗な第 1 部、ひきつづいてそのしめくりとなる混声 4 部のコラールとで、ライブツィヒ大学教授、トーマス学校校長として長年バッハと親交があり、バ

ッハの着任以来大いに励ましを与えてくれたエルネスティ(1652-1729)の、一徹な生涯を偲ばせるにふさわしく、雄々しく骨太のロマ書 8:26,27 の信仰を、かげりのない明かるさで、力強く歌いあげている。

第 1 部:

(a) 二重合唱(SATB / SATB)

変口長調, 8 分の 3 拍子 4 分の 4 拍子。

「“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです」(ロマ 8:26)。

(b) フーガ(SATB)

変口長調, 2 分の 2 拍子。

「人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです」(ロマ 8:27)。

第 2 部: コラール(SATB)

変口長調, 4 分の 4 拍子。

最後をしめくくるコラールも、M.ルターの 来ませ 聖霊 主なる神よ M. Luther, “Komm, Heiliger Geist, Herre Gott”(1524) の最終(第 3)節で、まさに、生も死も貫いて神のみもとへと前進あるのみ、という、まことに高揚した信仰の激励歌となっている。

きよき 愛の炎 われを 慰め
よく 主に 仕えしめよ
悩みに 勝たしめよ
み力に より 弱きを つよめ
ここに 雄々しく 立ち
死と生 貫かしめよ
ハレルヤ ハレルヤ

カンタータ第26番

(はかなく むなしき 地なるいのち) BWV26

初演：1724年11月19日（三位一体節後第24日曜日）、ライプツィヒ。

ヨーロッパ全土を蔽って破壊・荒廃の地と化せしめた30年戦争（1618 - 1648）が、ようやく終わりを告げて4年、眼前に広がる虚無の嘆きをうたった、ミヒャエル・フランクの「はかなく むなしき 地なるいのち」M. Franck “Ach wie flüchtig, ach wie nichtig“（1652）の全節に基くコラール・カンタータである。

編成はホルン、フルート、オーボエ3と弦楽合奏、通奏低音。

全曲にわたる自然観照

基調コラール全体で13節あるうちの第1節と最終（第13）節とを、最初と最後の合唱とした枠組の中に、テノール・バスの男声アリア、アルト・ソプラノの女声レチタティーヴォが交互に、コラール中間の第2 - 12節の内容をパラフレーズしてゆく、典型的なコラール・カンタータの構造をとる。

1. 合唱

コラール第1節 はかなく むなしき 地なるいのち（最終節と同じ）。自然のたとえ 霧（もや）...消え去りゆく。そをとくと悟れ（コラール最終節の結論への方向づけ）。

2. アリア（テノール）

自然のたとえ 流水...過ぎゆく、奈落の淵...呑みつくす。フルート、ヴァイオリンのオブリガート。

3. レチタティーヴォ（アルト）

自然のたとえ 花...うつろいゆく、しばみ、変わり果つ 滅び去らん 短いセッコ・レチタティーヴォ。

4. アリア（バス）

自然のたとえ 洪水...襲い 荒らしつくす。オーボエ3のオブリガート。

5. レチタティーヴォ（ソプラノ）

自然のたとえ 土...戻る 忘れ去られる。短いセッコ・レチタティーヴォ。

6. コラール（合唱）

コラール第13節。はかなく むなしき 地なるいのち（第1節と同じ）。自然のたとえ 見るもの[すべて]...過ぎ去る。

恒常的にとどまるもの

これだけ自然のたとえを曲ごとに積み重ねて、すべての自然現象を観照した末、何ひとつ恒常的にたよれるものはないこの地上で、永久的にとどまり、ながらえるものとは言え、ただひとつ、神をおそれる信仰である、と、短いながら最も核心的な告白で、このカンタータ全体がしめくくられる。

これを迎えるものは、最初から最後の一瞬まで、自然を見てよびおこされる詠嘆的な訴えに浸りつつ、やっと最後の最後の一行、主をおそるる者とどまらんとわに “Wer Gott furcht, bleibt ewig stehen”に至って、初めて救いと慰めにあずかるのだが、それにしても、この結論のフレーズは、あまりにもお添えもののようになり、短くつれない感じもする。

ユニゾンによる「うつろ」表現

しかし、全体の作風としては、いかにも手堅く、流麗で、虚無におちいりそうな崩れ、皮肉、嫌悪感など全くなく、厭世的な東洋風ニヒリズムの片鱗もない。強いてあげるならば、冒頭合唱のソプラノにおかれたコラール旋律の下で、それぞれ和声的に動いていた下3声部が、各フレーズの最後には、一斉に同音（1度）やオクターヴ（8度）のユニゾンに一本化する。はかなく むなしき もやと立ちのぼり また消え去りゆく そをとくと悟れ。1,4,5,8度音程の連続使用を回避することを重視する近代和声法に拠りながら、バッハがくり返しこのようにフレーズの末尾ごとにユニゾンを用いることで、この世の「うつろ」の様を、合唱の響きの上に象徴させたのだと、とることも出来よう。意味を強調するためというよりも、そのような「うつろ」の表現としてユニゾンが鳴りひびくのだと思われる。

いずれにしても、せわしなく積極的に、小刻みな動きをたたみかけながら、しかも端然たるその「はかなさ」「むなしさ」は、いわば東洋人の発想からは遠いものでありながら、むしろ聴く者の心をはげまし、審美的な慰めに酔わせてくれるようで、このカンタータの愛好者の多いゆえんでもあろう。

バッハのトーマス・カントル就任第2年、39歳、もっとも意欲的に作曲活動にもはげんでいた最中の作である。

5月10日、いよいよ新企画の第1回

本年度の第93回定期演奏会から8回にわたって、新企画になる連続プログラムが始まります。

新企画は、作品番号（BWV）の若い順から、毎年5曲を精選してご紹介するシリーズです。公演と並行して、楽譜とCDの発行も実現します。

詳しくは、この月報4ページの囲みをごらんください。

第1回の今回は、BWV番号1 - 50の中から取り上げました。《地なるいのち》の標題のもとBWV1、26、30、47に加えてモテットと、盛りだくさんの内容で皆様をお迎えします。

どうぞご家族・ご友人をお誘い合わせになって、ご来聴くださいますよう、お待ち申し上げます。

出雲幻想

大村 恵美子



出雲大社の初詣

古事記の物語の中で、私が昔から心にひっかかっていたのは、オオクニヌシノミコトにまつわるいきさつでした。いつか一度、出雲大社を訪れたいと思っていましたので、たまたま初詣のツアーのパンフレットを見て、この元旦に実現させたのでした。

合唱団の定期演奏会で、いつもソプラノ・ソロをおねがいでいる光野孝子様が松江のご出身で、かねがね「そのうち伺いますからね」といっていたのも伏線にあり、その光野さんが、昨年秋に、日中国交正常化30周年記念事業・日中合作オペラ「蓬萊の国 始皇帝と徐福」に出演されて、徐福以下の中国人役がみな靴を履いているのに、森の妖精キリモ役の光野さん以下の日本人役が裸足で飛びまわるのが印象的でした。このオペラでも、原始日本の国造りに想像が及んで、それにつけても日本神話の舞台の出雲に行ってみいたいという気持ちが募ったのです。

元旦には、早朝6時ごろにバスで着いた私たちを、テノール団員高橋恵樹さんとお父上とが迎えてくださり、4人で大社を見学しました。まっくらな早朝と、1時間後再訪したときの御来迎の輝かしい瞬間と、2通りの出雲大社を、心にとどめることができました。

梅原脚本「オオクニヌシ」をめぐって

その後また偶然にも図書館で、梅原猛『オオクニヌシ』（1997年、文芸春秋）を見つけて、読んでみました。『ヤマトタケル』『オグリ』に次ぐ第3の、市川猿之助スーパー歌舞伎の戯曲作品だということですが、古事記の中で判然としなかった点、たとえばヨミの国 トコヨの国 との関係とか、出雲大社を建ててもらったいきさつとか、もろもろの伝承が、梅原猛氏の

解釈によって、オオクニヌシの伝記として一貫したものとなり、こう考えることもできるのか、と興味深く読み終えました。

梅原氏については、マルチタレントとして、敬服することも多いが、少し首をひねりたくなるところもあり、それは日本の同時代人の誰についても言えることだと思っています。この国は、というよりも世界中といってもよいのですが、現在、既成価値をどうとらえ直すかで、大いにゆれ動いているところなのだと思います。

古事記について、万世一系の天皇の系統を確立させるという元来の編者の意図は、今ではそのまま受け入れるほうがまれで

（といっても政治的にはまだまだ強力ようですが）世界の神話との自由な比較研究によって、もっと広汎な、人類の根本的なルーツの探究のすばらしい宝庫となっています。私がその中でいちばん心をひかれるオオクニヌシの国譲りの物語は、梅原氏の脚本の中でも、平和の誇り高い理想をこの国に残すために、あえてこの国を、筑紫を治めていたニニギノミコトに譲りわたすことになっています。

オオクニヌシは、生き残る孫のコナムチに、このように訓します：

「タケミカツチは、おまえを大和へ連れていって、大きくなったらしかるべき重要な役につけると言った。...きっとおまえを国つ神[アマテラス系の指導者を天つ神という]の頭として、国つ神の反抗を抑え込もうという目論見をもっているにちがいない。

国つ神はほとんどすべて私を慕っている。その私がいとも簡単に国を天つ神に譲り渡したということについて不満をもっている者もあろう。その国つ神を懐柔するために私のたった一人の孫のおまえを立てる。それは、外からきた人間が土着の人間を懐柔するために行ういつもの手段だ。...おそらく、天つ神のほうがわれらより文明人であろう。人間は文明の発達とともに、人間が昔から持っていた尊い魂を失ってしまったのだ。...私はあまりに人間を信じすぎて、その純粋な魂の国を滅亡に導いたが、その理想が誤っていたとは思えない。

...100年も200年も経てば、かえってこのずる賢い侵入者たちも、彼らが支配する国つ神の清らかな魂に感化されて、少しはまともな人間になるかもしれぬ。...そうしたらこのオオ大和の国の人間は、天

つ神の魂より、より多く国つ神の魂をもつ人間になるにちがいない。

...おまえたち国つ神の子孫たちは、美しい魂をこの日の本の地に深く深く植えつける。それが私の天つ神に対する復讐だ！」

これを見て、またまた取りようによっては危なげな感じもしてきます。たとえば、敗戦後のアメリカ進駐軍に明け渡した日本人の国土と魂になぞらえるとか。

一般に個人をまつる社寺の大きいのは、その人の権力の誇示か、時の権力者が、敗者のタタリを鎮めるためだったそうで、オオクニヌシも、どこにもなかったような大きな社を建ててもらっても、全く住む気になれず、この世を去ってゆくのです。それをあれこれと思いちがいで、小泉首相と靖国神社との滑稽で深刻な関係にもなるのです。

小泉八雲との再会

松江で私は、またなつかしい小泉八雲と再会しました。彼は、日本人ほど宗教的な人たちはいないと感心して、松江の住民たちの一日を、事こまかに描写して紹介しています。これは、自分が善人だった八雲が、その反映をもるに松江住民に見て、ひいきの引き倒し位に、日本人を評価しているようにも思えます。幼くして母親の思い出とともにギリシャを去り、その後アイルランドのキリスト教学校の冷酷な寄宿舎で育った彼は、地形的なギリシャの故郷と松江との相似に心うたれ、アルカディアの至福を両地の住民に夢想したのだったかもしれません。

けれども、八雲がそんな気持ちで日本に住み、現実のひどさとのギャップに驚き悲しむことがなかったのだとしたら、彼が周囲を自分の理想で感化させてしまった結果か、それともその頃の日本人に、現実それに応えられるような魂が生きていたのだとしか考えられません。

同じ物語、同じ歴史を学んでも、ひとは全く相反する結論を引き出して自らのものとしてしまいます（現に、神話を政治利用した2月11日の建国記念日が日本人を鮮やかに大きく2つに引き裂いているように）、日本の豊かな遺産を私たちがどう受けつぎ、何をみざして将来を開いてゆくかは、とても大きな課題です。現在世界各地で争われている領土問題が、究極的には何によって解決されるか、結局は人間が何のプリンシプルのもとに生きようと意志するかにかかっているでしょう。歴史上の一地点で占拠したり、契約を結んだりした事実は、恒久的な保証とはなり得ないので、時代の要請と共に、住民の意思、全人類の地球全体への配慮の英知によって、合意をとりつけ直さなければならなくなっています。局地的なエゴのぶつかり合いも、もはや地球上には許されないのが現実なのです。

了

BWV 番号順に毎年 5 曲を精選 2003～2006 年の演奏計画

1998 年に、「21 世紀を迎え最終段階に入る東京バツハ合唱団」として発表された長期計画では、定期演奏会プログラム、「カンタータ 50 曲選」の楽譜・CD の発行等、2007 年に至るまでの、いくつかの事業計画が、一気に関連づけて伝えられました（『東京バツハ合唱団 40 年の記録』P.175 以下に収載）。

その後、2008 年以後もさらに継続して発展させる、という申し合わせとなりましたが、ここで練られた計画は、実現の早まったケースはあるものの、ほとんど大筋では変更なく、現在も進行中です。

定期演奏会の曲目として、2003 年から 2006 年の 4 年間に立てられた原則を、ここでもう一度確認してご紹介しましょう。

“初期作品連続演奏”（第 45 回定期、1979 年）以来、ヴァイマル・ケーテン期、ライプツィヒ期と、ほぼ作曲年代順に連続プログラムを組んで演奏を続けてきましたが、一昨年 5 月の“祝典のバツハ”（第 89 回定期）に最後期の作品をまとめて取り上げ、この 20 数年におよぶ長丁場の企画を終了しました。

昨年の創立 40 周年記念特別プログラムをはさんで、本年度からは、作品番号（BWV）の順に毎年 50 曲ずつを対象とし、その中から未演・既演とリマゼで、演奏したい年間 5 曲を選ぶ。モテットを 1 曲ずつ加える、クリスマス・オラトリオは従来通り前後に分けて毎年演奏、の原則で選曲しています。

「50 曲選」の楽譜は、第 4 期（2003 年既刊）・第 5 期（2004 年完結）からこのシリーズと合流し、CD 発行は、既演のもの約 30 曲（録音済み）これから録音するもの約 20 曲を組み合わせて、今春スタートします。

全体の定期演奏会、楽譜・CD 発行の関連は以下の通りです。

<BWV1～50> より 5 曲

第 93 回(2003.5) **BWV1, 26, 30, 47** (+モテット)

第 94 回(2003.12) **BWV40** (+クリスマス・オラトリオ後半)

<BWV51～100> より 5 曲

第 95 回(2004.春) **BWV77, 78, 93, 99** (+モテット)

第 96 回(2004.12) **BWV72** (+クリスマス・オラトリオ前半)

以上 10 曲は、「楽譜」第 4 期(2003 年既刊)に収載、「CD」第 期～第 期(2003～2005 年)に発行。

<BWV101～150> より 5 曲

第 97 回(2005.春) **BWV116, 129, 137, 147** (+モテット)

第 98 回(2005.12) **BWV123** (+クリスマス・オラトリオ後半)

<BWV151～200> より 5 曲

第 99 回(2006.春) **BWV180, 187, 194, 197** (+モテット)

第 100 回(2006.12) **BWV192** (+クリスマス・オラトリオ前半)

以上 10 曲は、「楽譜」第 5 期(2004 年)に収載、「CD」第 期(2005 年)、第 期(2007 年)に発行。